

京交山岳部報

№ 396

'85 10月号

[第1554回例会] 府県境の山シリーズ(60-6)

親不知 604.6m (R)

日 時 10月10日(祭) みぶ 7時出発

コ ー ス 京都-福知山-新庄-口榎原-奥榎原-豊高用水池...親不知△

担 当 者 高速 岡田茂久(TEL 2-3282)

[第1555回例会]

沖ノ山 (T)

日 時 10月13日(日) みぶ 6時出発

コ ー ス 京都南-佐用-R 373-河合-一堂本-林道終点...△沖ノ山

担 当 者 梅津 吉田 武(TEL 788)

備 考 兵庫県と鳥取県の県境の山ですので早朝に出発します。

[第1556回例会] オリエンテーリング入門

大山崎周辺

日 時 10月20日(日) 午前9時 山崎昇天前広場 集合

担 当 者 OB 近藤 薫(TEL 961-0185)

備 考 9月集会にてインドアの講習会をやりましたので、今度はアウトドアで実際のコースでやりたいと思います。賞品を出したいと思っていますのでファミリーで多数参加して下さい。

[第1557回例会]

三重岳 (T)

日 時 10月27日(日) みぶ 7時集合

コ ー ス 京都-大原-途中-朽木-保坂-石田川...△三重岳

担 当 者 本局 大槻雅弘(TEL 737)

備 考 マイカーで行きますので希望者は担当まで連絡して下さい。

今月の集会

救急法のテーピングについて (鷲見担当)

10月11日(金)

岳連ルーム

企画運営リーダー会

10月21日(月)

岡田宅



フリー化

岡田茂久

先日のことである。ひさしぶりに金毘羅のグレンデに岩の感触を楽しみたくでかけてみた。若手のリーダー連からもう止めるときとひやかに似た忠告をうけ、購入を躊躇していた岩登り用のラバーソールを、これならよかろうとアプローチも利用できるパターン底のラバーソールを秘かに手にいれ、その試運転もしたかったのである。通常ラバソールを履くと一級上のグレードに相応するといわれる。しかし結果はさんざんであった。

グレンデにおいても昨今はほとんどのルートがフリーで登られている。決して器具を使って登ってはいけないことはないが、此頃はプロテクション(支点)に使用用具以外にアブミ等をガチャつかせながらグレンデを登っているのはまずみない。周辺をみるとラバーシューズにショーパン・ランニングシャツ、腰には滑り止めに炭酸マグネシウムの粉を入れた小袋を下げ、中にはヘルメットは無しでロープもつけずに岩場を飛びまわっている単独行の若者もみられる。自信があるからだろうが、我々から見れば安全とはほど速いものに見える。

さっそく挑戦してみたのであるが……、我々が常々いっている「岩登りは歩くことの延長であり、岩の一部に立つことである。この二つを組合わせて体重を移動させる。体重は常に足で支え、手は重心の移動の補助とする。三点支持の基本を守り重力に対し垂直に立つようにシバランスを保つ、これが岩登りの原則である。こんなことはどこかに置いとぎ、オーバーハングの乗越などは指先と腕の力がものをいう。しかし悔しいことに小生にはオーバー気味の体重を何度も持ちあげる持続力は腕にも指にもなく、ついには感覚がなくなりずり落ち宙吊りになる醜態。いささか気にしている腹を擦りむき汗が滲みて痛い。またまたシェーブアップとトレーニング不足を痛感する次第となってしまった。

帰途のことである。いつものように心地よく疲れた体とはいえ、思わぬところに身が入った体をいたわりながらY懸沢を降りていった。そこで二人の若者とであった。一人は両足をひきずり沢を這いずり下っている。もう一人は兩名のザックを担ぎ懸命にサポートしているのである。聞くとピラミットの岩場で転落し両足を負傷したとのことで、どうやらクルブンは骨折しているようであ

る。もとより我々のパーティは彼等をサポートし岩倉の病院まで夕暮のなかを送り届けたのであるが……。

残念なのは、彼等の事故が起きたとき又Y懸沢を這いずり降っていたときには、まだピラミットの岩場には他に何パーティかがいたということである。どうして負傷者を目の前にして搬送に手をこまなかつたのであろう。あまりにも無関心さを考えさせられるものである。

山の男（彼等を含め山男といえるかどうかは知らないが）として、山に親しむ仲間としての意識はどこにいったのであろう。自分達の領分は自分達、他人のことはあずかりしないというような風潮が山にもでてきたとすれば嘆かわしいものである。従来の岩登りの基本を追加しなければならないような岩場ルートフリー化は時の流れのなかで仕方ないのであろう。しかし山男のモラルを書換えねばならないような精神のフリー化はしたくないものである。

「お先にどうぞ」とルートをゆずっても礼もなく、落石を起こしても岩場のせいにして、負傷パーティの難儀も人事、なんとも後味の悪かった岩場の日であった。

夏山登山大会

八ヶ岳

井上一夫

京交山岳部の新しい企画の夏山登山大会に参加した。年に1度くらい賑やかにみんなで過ごしてコミュニケーションをはかるといのも目的の一つである。

かくして夏山登山大会に集る22名は壬生車庫を8月9日夕刻、マイクロバスにて多数の人々に見送られながら出発した。現地までの運転は和田さんと吉田さん、そして大倉さんである。

京都東インターから名神に入りマイクロバスは快調に走ったが、30才～56才で平均年齢43才と頭の重い年齢構成である。車中吉田リーダーからの注意や装備分担などの後、各自次の日の行動に備えて体を休めた。現地までの運転は和田さんと吉田さん及び大倉さんが交替でやってくれました。

麦草峠へは京都を出発してから約5時間で到着した。ここで仮眠する者と美濃戸口までバスを回送していただく大倉さんと三橋さんとに別かれた。到着して約30分後マイクロバスは出発していた。後に残った者も各班毎にテントを張り早々に仮眠に入った。夜空は満天の星であった。

朝の冷氣（約9°C）で目が覚めたのは午前4時頃であった。我が班（古市、出海、方山、井上）は、他よりも早く起き出して朝食その他出発の準備を始めた。天気は上々である。本日の行動は麦草峠から白駒池、高見石、中山、天狗岳を通過、最終はバス回送組と落ち合いオーレン小屋までである。各自持参の弁当に熱い味噌汁の朝食を済ませ出発した。麦草ヒュッテから遊歩道の様な林の

中を進んだ。30分も歩くとこの道も並行して走っている国道と合流した。そして、白駒池の駐車場から再び山道に入った。いよいよアスファルト道とはしばらくのお別れである。白駒池までは見通しのきかない林の中の緩い登りである。白駒池は鏡の様な水面には薄くもやが掛っていた。静かな山間の湖である。白駒池から中山までも見通しの悪い山道であった。途中に立ち寄った高見石は眺望が良く、足許には白駒池が、そして、夢科山などが良く見えた。

中山付近から天候が悪くなってきた。ガスが出て眺望もきかなかった。中山峠の手前で東側が深く落ち込んで眺望の良い所へ出た。時折りガスの切れ間から天狗岳と硫黄岳の爆裂火口の絶壁を見上げる事ができた。

中山峠からは吉田リーダーが「話しのタネに」との事で、黒百合ヒュッテへ向った。大きなのれんの掛るヒュッテ前で小休止した。ここではアイスクャンデーが売られていた。雨がパラパラと降り出したが、幸い大きな崩れにはならず、天狗岳への登りに掛った。大きな岩の急斜面をしばらく登ると干上がったスリバチ池の縁に出た。平坦な道がしばらく続き天狗岳へと登山道が延びているのが見えた。

天狗岳は東と西にピークを持ちその間を吊尾根が結んでいる。登山道を登ると東天狗岳へ着いた。ここで昼食後、三角点のある西天狗岳へ行き、今回最初の万才を行なった。天狗岳からは根石岳を通して箕冠山からオーレン小屋へ直接下る道を通った。

オーレン小屋へ到着すると小屋では風呂を沸かしているところであった。しかし、残念ながらキャンプの者は使用できないとの事であった。その分、小川の冷たい水で思存分顔を洗った。各班キャンプ場の思い思いの場所にテントを張り、割り当ての肉を使い野菜いためやハンバーグ等の夕食の仕度に掛った。各班とも腕に自慢の名コックがいて、ホテルオークラやホテルオーレンの開店である。我々から遅れる事約30分で、大倉さんと三橋さんが到着した。静かな谷間が急ににぎやかになったようである。

大倉さん、三橋さんは美濃戸口までバスを回送して、そこで仮眠し我々よりも遅く出発したそうです。赤岳鉱泉から一足先に硫黄岳へ登ってこられたとの事で、昼食時に岡田さんとのトランシーバーでの交信では可成りしんどい登りを登っていたようでありました。どうも御苦労さんでした。

早い夕食後、全員が輪になって二次会の始まりである。差入れのエキス等を飲みながら色々面白い話が出たが、一つ一つ記すには余りあるので省きます。キャンプ場も黄昏の頃、あちこちのテントでは早くも寝息が聞えた。

8月11日は雨と風の音で明けた。各班は雨の中朝食を済ませ、テントを撤収して出発の準備をした。雨は小雨で予定通りのコースを行く事になった。本日はオーレン小屋から夏沢峠・硫黄岳・横岳・赤岳・阿弥陀岳を経て御小屋尾根から美濃戸口までである。

出発する頃には雨も上がって夏沢峠までの緩い坂を登っている間には天気も回復してきたように感じた。夏沢峠で小休止の後、硫黄岳へ登っている間に再びガスが掛かって霧雨が降るようになった。硫黄岳の山頂付近は広く平坦で登山道沿いには大きなケルンがいくつかある。硫黄岳の三角点は火口沿いに登山道から少し離れた所にある。ガレた所に高山植物が咲いていた。深く落ち込んだ

切り立つ絶壁の縁から恐る恐るのぞいたがガスのため視界がきかなかつた。庇の様に突き出した絶壁の縁には大きな亀裂が走り、今にも崩れ落ちそうであった。三角点で今回初めて全員が揃っての万才をやった。

硫黄岳から横岳までは少々大変であった。硫黄岳石室付近の可憐な駒草の群生に見とれながら歩いているうちに横岳への岩尾根の登りとなった。相変わらずの降雨とガスで視界の悪い中で鎖の付く岩稜を横岳へ目指した。横岳頂上で小休止の後、岩稜の急な下りを一気に下った。

赤岳石室付近で風雨が強くなってきたので全員雨具等の装備を整えて出発した。昔、八ヶ岳の赤岳石室を知っている人によると以前は名の通りの石室であったそうです。今ではりっぱな木造の小屋になっていた。石室の名のみ残すだけである。そのせいか休憩料が一人200円也との事で、我々は小屋に入らず、建物の影で風雨を避けながら雨具の装着を行なった。

八ヶ岳主峰の赤岳への登りも急であった。ガスの中、足許の石ころを見ながら登った。赤岳山頂で昼食となった。昼食後、三角点で万才して記念撮影の後、出発した。

赤岳からの下りも岩尾根で、いくつかのピークを越えながら下った。中岳は通過したがその下りでガスも幾分薄くなってきた。下の方には行者小屋が見えた。阿弥陀岳と行者小屋への分岐で小休止して最後の阿弥陀岳の登りに掛った。時折りガスの中にうっすら赤岳が姿を表わした。

阿弥陀岳山頂で雨具をぬぎ休憩して出発した。ここから美濃戸口までは長い尾根の下りであるが約一時間は急な木の根等の出る悪路であった。くたびれた足には非常に苦しい下りであった。さすがに休憩しても声が少なかった。

不動清水への分岐辺りから道はなだらかになり御小屋山への緩い登りの後、三角点を通過して美濃戸口へ向った。途中の小休止の間に大倉さんが先行してバス駐車地点に無事到着したと無線が入った。美濃戸口には全員元気に到着した。そして装備の整理もそこそこに出発し、諏訪温泉で入浴し諏訪パーキングで夕食を済ませて一路京都へ向った。

[コースタイム]

8/9(金) 19:25 壬生出発(マイクロバス) - 20:00 京都東インター 21:08 養老サービスエリア - 23:30 恵那サービスエリア - 23:45 諏訪インター

8/10(土) 0:35 麦草峠着 仮眠(テント) ... 4:30 起床(10°C)(好天) 朝食... 5:35 出発... 6:15 白駒池着(休)... 6:20 白駒池発... 7:00 高見石着(休)... 7:20 高見石発... 7:55 ~ 8:10(休)... 8:35 中山着(休)... 8:45 中山発... 9:10 中山峠... 9:25 ヒュッテ黒百合着(休)... 9:45 ヒュッテ黒百合発... 11:00 天狗岳山頂着 昼食... 11:55 天狗岳山頂発(から身)... 12:05 西天狗岳山頂着 パンザイ... 12:15 西天狗岳山頂発... 12:25 天狗岳山頂着... 12:40 天狗岳山頂発... 13:15 箕冠山頂上着... 13:25 箕冠山頂上発... 14:00 オーレン小屋着 テント設営... 16:00 夕食... 17:00 ミーティング それぞれ勝手に就寝

8/11(日) 4:30 起床(雨、風強し) 朝食(雑炊)... 6:15 出発... 6:40 夏沢峠着... 6:45 夏沢峠発... 7:40 硫黄岳頂上着... 7:55 三角点 パンザイ三唱... 8:10 出発... 8:20

硫黄岳石室小屋 13°C …8:30 出発…9:10 横岳頂上着…9:15 横岳頂上発…
9:45～10:00 休憩…10:25 赤岳石室着（風雨）…10:35 赤岳石室発…11:10
赤岳山頂着 昼食…11:50 赤岳三角点 バンザイ…12:05 出発…12:40 中岳（通過）
13:15 アミダ岳山頂着…13:35 アミダ岳山頂発…14:35～14:55 休憩…15:40
御小屋山三角点（通過）…16:00～16:10 休憩…16:30 美濃戸口着…16:40 美濃
戸口発（バス）—17:45 諏訪温泉着（入浴）—18:30 諏訪温泉発—19:05 諏訪イ
ンターチェンジ—19:10 諏訪パーキングエリア 夕食（1,000円）—19:50
出発—21:15 恵那パーキングエリア—23:20 大津—23:30 京都東インター（大槻
貞、原田、山元、井上、井戸、下車）—0:00 壬生到着

（記録）井戸 澄夫

夏山登山大会

美濃戸口から本隊合流まで

三橋 勲

麦草峠で本隊と別れて下山地点へ車を回送する大倉君と私は真夜中の道中なので道を聞く訳にも
いかず、あちこち迷ったあげく、ようやく3時過ぎに目的地に到着した。大倉君ごろうさまでし
た。仮眠後、水場を求めて付近を偵察するが、結局、水なしの朝食をするはめとなった。7時20
分出発、登山口まで10分程くだって標識確認の後、カラ松林の林道を抜けるとゆるいくだりとな
り柳川の橋を渡る。車が通れる広い道が続いたが途中で細い小道に入るテープの目印があり、そ
ちら側を進む。広い林道を歩くよりこちらの方が山屋としては気分がよい。しばらく行くとまた林道
と合流する。

登山者は夏休みなのでファミリーやグループ等にぎやかなものである。やがて美濃戸に到着、一
ぶくする。山の方はガスで何も見えない。三軒目の山荘を過ぎると行者小屋コースと分れて高巻き
道を進むようになり、北沢コースの登山者も半減したのかあまり見かけなくなる。それでも林道終
点まで来ると数パーティの登山グループが休憩していた。ここから本格的な山道となり5分程進む
と、谷コースと山腹コースの分岐点に出た。増水時は通行不能という標識を見ながら河原を行くと
橋があり、谷を右岸や左岸に渡りかえすようになる。空模様がだんだんあやしくなり、とうとう小
雨が降り出したので途中で雨具をつける。やがて山の方に進んで行くのでおかしいなと思ってい
ると山腹コースの合流点なのであわててバックする。おとしよりグループを追いこすと、もうそこ
に赤岳鉱泉の屋根が見えてきた。

雨降りなので小屋の中に入り昼食準備をする。小屋の中はすでに数パーティの人達でエッセンが
始まっている。我々も奥の方に空席を見つけて朝から持っていたみそ汁とサラダやキュウリにパン
と和洋折衷の食事となる。後からやってきた老人グループから花の名前を教えていただく。還暦の

年から山登りを始めて今年で3年目とかで、昨年も八ヶ岳へ来たが天候悪く引返したとの事。心臓が悪いので薬持参で登ってきたという。時間をかければどの山でも登れますと意欲満々であった。

食事を終えて小屋の外に出ると雨もやんでいるので出発する。谷の渡渉地点で家族連れに出合い「ヤナギラン」を教えていただき早速カメラに収める。このあたりまで来ると、朝から盛んに本隊と交信していたコールが、やっとキャッチできるようになり、本隊が無事天狗岳の三角点に到着した事がわかった。我々も3時頃、テント地に合流できると交信する。

我々と前後になって歩いていた親子連れのパーティが、この急坂の途中で母親を追い越し、元気な子供達が先を歩いていたので、「お母さんはさっき下で見かけたので少し待ってあげなさい。」と喋っていっしょに休憩する。やがてお母さんが登ってこられたので我々はお先に失礼してさきに登る。

赤岩の頭付近になるとジグザグの登りとなり、付近が開けて縦走尾根がガスの間から見え隠れするようになってきた。峠に荷物をデポして目前にせまった硫黄岳に登ることにする。ガラガラした岩場を越えると広い頂上に出た。北八ヶ岳方面はガスが晴れていて遠く蓼科山まで見透せた。硫黄岳の噴火口はコの字形になっていて、下を覗くと岩の断層が年輪をきざんだようになっており、赤茶けた土肌が見えその先はグリーンの樹海があり本沢温泉の屋根が見える。そこから峠に向けて目を移すと夏沢峠があり、ここまでかなりの高度差があった。

反対の赤岳方面はガスで何も見えず、石室付近が時々ガスの晴れ間から望まれた。本日のテント場のオーレン小屋が、さきほどの本沢温泉から夏沢峠をはさんだ反対側に見えたところで荷物のデポ地点に戻る。無線で連絡すると本隊は既に到着しておりテント設営中であるというので急いで下降する。やがて谷のせせらぎが聞えてくる頃ヤッホーと声をかけ、お互いに確認しながら夕食の仕度中の本隊と合流した。

〔コースタイム〕

7:20 別荘地…7:30 美濃戸口…8:20～8:45 美濃戸…林道終点 9:35～9:42…10:45～12:00
赤岳鉱泉(昼食)…13:20～13:30 赤岩の頭…13:45 硫黄岳…△ 13:55…14:15 デポ地点…
14:50 テント地合流

夏山大会

「八ヶ岳」に想う

梅津 吉田 武

60年度の年間計画としてのメインの山行として、「八ヶ岳」に夏山、秋山そして冬山と入山する事が決まり、リーダー会議で今回の夏山大会の形態を話し合った。冬山コースの下見班と縦走コースの班というコース設定がされたが、山岳部員が参加しやすいような行程及びルートを選んで、全員が同じコースで縦走する事が決った。

「テーマ」として

- (1) 山岳部員の出来るだけの参加よびかけを行う。
- (2) 装備の軽量化を目標にしてテント泊りとする。
- (3) 車は1台で麦草峠より美濃戸へ車を回送する方法。
- (4) トレーニング例会、及び日頃の体力トレーニングについて。

以上のように僕なりにテーマを設けて担当者、リーダー3名で話し合った。

反省として

- (1) 参加者は26名になったが、出発の間際になって4名の人が参加出来なくなった。現在の山岳部ではこの位の参加者であれば成功と思っている。
- (2) 装備については必要最少限の荷物を持って来ていたように思う。装備と食糧とは関連性があるので今後についても1泊程度の山行では個人々が食糧を持参する方がよい。特に縦走の場合は装備の軽量につながる。ただし今回のように多数の参加者がある時考えねばならない。副食については、最近手軽なおかずや缶詰があるので大いに利用すべきである。その他ワンパターンの食事の時もあるのでこの点は一度デスクッションをすると良いと思う。
- (3) 麦草峠から美濃戸へ車を回送する事については、深夜にもかかわらず大倉君と三橋さんには大変御苦労さんでした。完璧な回送で感謝するのみである。
- (4) 平均年齢43才と高令になっているので、もう少し自覚してトレーニングをしてほしい。粘り強いトレーニングが自信となって3000m級の縦走も出来るのであって、3000m級のアップ・ダウンのコースは軽々に思わないようにしてほしい。

いろいろ書きましたが、全体的に成功した山行であった。参加出来なかった人にはいろいろと応援していただきありがと御座居ました。そして参加された方には大変協力していただきほんとうにありがと御座居ました。

八ヶ岳登山について

大倉寛治郎

今回の夏山登山大会は、八ヶ岳縦走である。計画、立案、担当者との数回の打ち合せを重ね、サブリーダーとして、車の回送運転を受け持ち、苦しいながらも何とか計画どおり終える事ができた。

麦草峠2,120mの夜道の回送は、目標が見わけにくく山麓を右往左往しながら、三橋氏と地図標識を確かめつつ、何とか目的地の美濃戸別荘地(ポンプ小屋上部、御小屋尾根登山口付近)に着いたのは、予定より遅れて午前3時過ぎであった。そのまま仮眠する。午前6時過ぎ起床し、改めて現在地点を確認する。(もし、まちがっておりてきたら、担当者がわらって取りに行く事だ!!)

別荘地内をぬけ、美濃戸口の登山入口へ…。冬山のコースの下見も兼ね柳川沢にそって、北沢、赤岳鉱泉、赤岩ノ頭2,656mまで樹林の中、高度差1,000mを登るのもさほど苦にならず、足でおぼえる事ができた。途中、秋の偵察等も考え進む。赤岩ノ頭からは、オーレン小屋2,320mテント地まで荒れた登山道を下り、本隊と合流したのは午後2時50分であった。

総勢22名、平均年齢43才、中年も若者も(自称若者も)、全員トラブルもなくめづらしい高山植物と出逢えたりして、美しい大自然の中、それぞれにロマンにひたりながら主峰赤岳を初めとして、八ヶ岳の縦走が終った。

- ◎ 歩行のペースが、初めなじめなかった方々もあったが、全体としてよかった。
- ◎ 食料・共同装備は計画どおりに。
- ◎ 個人装備が標準7,665Kgであったが、全体として工夫しだいでは、もう少し軽量化ができるのでは…？。
- ◎ 食料から出るゴミの処理方法。(今回はテント地で、処理できたが。)
- ◎ ゴアのテントー 雨の時、縫い目よりもれる。
- ◎ エスパースの5人寝はしんどい。

=思いついた事を書き上げてみました。=

以上

笠ヶ岳

△2,898m

大槻貞従

日時 7月26日(金)午後8時～7月28日(日)午後10時

場所 新穂高温泉 笠ヶ岳

一夏に2回は3,000m級の山でのんびり遊びたいと思い、あの山、この山と夢をえがいているがその中でも人があまり行かない静かなコースを選ぶようにしている。わざわざ都会の喧噪を離れて来たのに、戦場のようにペースをみだされる場所に身を置いたのでは、休養にも避暑にもならないから。その意味で昨年行った薬師岳も静かだったし、雄大な自然に溶け込ませてくれ、のんびりと英気を養うことが出来た。

7月26日(金) 晴 PM8:00 九条車庫を津田さんのスマートな車、カリフォルニアで出発。中津川I.Cを下りて257号線を走った。41号線に行くよりも距離的には速いが時間的には速いようだ。車は避暑客の昼間のさざめきが今しがた眠りに着いた。平湯新穂高温泉街を通過し、午前1時半マイカー進入終点地到着。所要時間5時間半。よく整備された案内所前の駐車場でテント設営。満天の星空をながめながら、ぐっすり就寝。

7月27日(土) 快晴 午前5時起床。よくひらけた温泉と登山基地の街で目ざめた我々は、

すがすがしい空気を胸一ぱい吸い込んで、今日これから繰り広げられるであろう未知の景色へのあこがれを思い描きながら出発の準備に余念がなかった。大糸沿線の有名基地のような雑踏はなく静かな雰囲気の中を蒲田川の清冽な流れに掛かるめぐみ橋を渡り耳に心よいせせらぎを聞き、目には久し振りに見る手の切れそうな冷たい清流をながめながら、約3.5Km 蒲田川右岸を廻った。この地形ははじめから山稜が急峻にせまり、真青な空にどの山か分らないがかなり高峰が見えている。地図を調べると笠ヶ岳そのものらしい。広い北陸電力の作業道を約50分で分岐点標高1,400m(登山口)に着き、朝食をとることにした。ちょっと動いた後の方がうまい。見ていると、三三、五五登山パーティはやってくるが、鏡平、三俣蓮華方面へ行くパーティが多いようで、我々が行く笠新道はほんのわずかだ。静かな山旅が楽しめそうだ。2,300mの乗越しまで標高差900m、4時間。これを越せばあとは楽なので第1目標をがんばろう。なんともいえないほのかな樹林帯の香りの中、良く踏まれた土道で歩きやすい。振り返って見ると新穂高岳ロープウェイがだんだん下に見えていき、特徴ある焼岳が大きくせり上がってくる。移り行く景色の変化を楽しみながら、日照りにジリジリこがされながら黙々と高度をかせいだ。地図にある岩小倉沢の上部は水溜れ状態で水筒は空のまま登るはめとなった。ジグザグの急登が、いつ終るともなく続くが、無駄口をたたきながら、汗を流すのが楽しく焼岳が同じ高さになった頃、ひょっこりと乗越に着いた。すると眼前は広々とひらけカール状のすりばちにお花畑が我々を迎えてくれた。笠岳の全容が姿をあらわし、横に長く裾をひいた稜線が指呼の間にのぞまれる。午前11時。この辺りは日影が少くカンカン照りに少々うんざりしてきたがどうしようもなく、見ると1Km程前方に雪渓が見える。その雪渓まで水分は果物やらキュウリですませた。やっと着いた岩影で日照りを避け雪渓からしたたる冷たい水で何回も頭から水をかぶった時の気持ち良さ、なんとも筆舌に尽しがたい。暑さか、荷物が重すぎるのか、今日は津田氏の調子がもう一つよくない。三橋、大槻雅両氏は元気なもので、我々が一ぶくしている間に抜戸(ヌケド)岳へ往復した。私はそんな元気はなく、その間のんびりと涼風に吹かれながら対岸に見える穂高連峰のひだ一つ一つを地図と照合し、ほんやり楽しんだ。左から檜ヶ岳、南岳、大キレット、北穂、滝谷、溜沢岳、奥穂、ジャンダルム、ロバの耳、西穂と続く雄大なパノラマ。スカッと晴れ上がった青空の中にもじっと見ていると溜沢岳辺りはなぜか雲がまつわりついて離れない。水蒸気が湧いて来るらしい。

鳥もかよわぬ滝谷の切れ落ちた様。岩のゴツゴツした奥穂。岩の殿堂穂高の様をふつふつと風に乗せて伝えて来る。3年前登った常念岳、蝶ヶ岳から眺めた穂高連峰を今日は裏側から眺めたことになる。ながめていると、三橋、大槻両氏が帰って来た。5人そろって小笠を後にし、ピークを目ざした。これからは、だらだら登りで楽なもんだ。頂上直下のテント場到着。両大槻はテントで幕営することにし、あと3人は山小屋泊り。御老体も今日ばかりは無理も出来んと見えて、沢山持って来た食料品を放り出したので、有難く頂戴した。テント生活者にとって思わぬと馳走の山となった。私もおかげで山小屋まで食事をしに行かなくて済むことになったが、夕闇迫る頃、豆狸が徳利持って酒買いに(山小屋へ)夕焼けの別天地をふらふらとなんともいい気持ちです。こんなこと何回でもやりたいなと思う。ただ雨だけは降らんように…。テントの数は6張りぐらいで、若者グ

ループにアベックグループが多く、その一つのべっぴんさんに雅弘氏がいつものようにひやかした
ら『私達、夫婦ですもの…』とやり返えされて、ガックリ。あほらして、もう早う寝よか…。

7月28日(日) 晴時々曇 午前4時半起床、ご来光を4時58分にバチリ、槍ヶ岳の肩から
顔出した。昨夕こしらえておいた雑炊を取り出して温ためた。とろびんになった汁がすぐ落けて、胃
袋を満してくれる。小屋前6時に出発、笠ヶ岳頂上6時20分着。例によってパンザイ三唱。今日の
下りは頂上2,898m-槍見温泉1,000m=1,900m、愛宕山2ツを下りることになる。足がガタ
ガタになることだろうと覚悟して下りにかゝった。地図をにらみながら稜線を目で追っていくと、コ
ブが多いので、これは大変なアルバイトをしなればならんと見えたが、うまいことに稜線はず
れてトラバースした道が、日影側にうねうねと続いている。2,500m地点、2,200m地点から
振り仰いだ 笠ヶ岳は雄大そのもので、一直線に長い裾野からせり上がっている。道々草におりた夜
露をすすってみたら、これ又結構喉の渇きを癒してくれた。病人の唇をしめらせてやる意味がよく
体験出来た気がした。1,800m地点ほどで沢のせせらぎが聞えてきた。日照りと渇きの中ではなん
と心よい響きをもっているものか。もちろん大休止で昼食の時間になった。日射病にならんよう、
頭から水をざぶざぶかぶった。にぎやかにラーメン、雑炊がゆげをあげる。私は、パンを水筒につ
めておいた コンスープで流し込んだ。何か水気と一緒にないとパン類は喉を通らない。さりとて
水だけガブ飲みはよくない。暑気のきつい時は、食が進まないものだが、こういふ時こそ一日に一
回はしっかりしたものを食べておかないとバテることになっている。やがて森林地帯に入り、岳樺
が旅情をそゝる。右側に錫杖岳の遠容がせまってきた。さすが、まっすぐに屹立した魔の山という
感じで、ロッククライミングに人気があるらしい。今日はなぜか、すぐ腹が減るので歩きながらポ
ケットから行動食をつまみ食いする。1,400m地点ぐらいから足が笑い出した。小休止しながら
やっと着いた所が槍見温泉の露天風呂だった。三橋氏が車を早々と回送しておいてくれた。感謝。
三橋氏持参の生ビールを露天風呂横の手が切れそうな川水に冷しておき、一風呂浴びた後、無事の
下山を祝って乾杯!! バテ気味の津田さんもビールを見たら元気百倍。帰り道に夕食は例によって
中津川I.C前のオリブ食堂で食いたい放題、なんぼでもある。1,500円でバイキング形式にな
っている。京都着、午後10時。

【コースタイム】

- 7/26 京都東 21:00 - 中津川 23:00 - 下呂 24:00 - 高山 1:00 - 新穂高温泉 2:00 (仮眠)
7/27 出発 5:15...出合(朝食) 6:15 ~ 6:40...杓子平(昼食) 11:35 ~ 12:16...水場(雪
渓) 13:05 ~ 14:03...稜線 14:18 ~ 14:23...△抜戸岳 14:41 ~ 14:50...デボ地 15:05
~ 15:30...笠ヶ岳小屋 17:00
7/28 笠ヶ岳小屋 6:00...笠ヶ岳 6:15 ~ 6:30...トラバース地点 6:20 ~ 7:03...合流地点 7:28
...雷鳥岩 8:54 ~ 9:10...クリヤの頭 9:30...谷(昼食) 10:45 ~ 11:20...槍見温泉
14:35 ~ 15:47 - 平湯 16:12 - 高山 16:52 - 下呂 17:50 - 中津川(夕食) 18:50 ~
19:40 - 養老 S.A 20:40 ~ 21:18 - 京都東 22:20

【参加者】 津田、原田、三橋、大槻雅、大槻貞 5名

遥かなる山

高く峻しかった笠ヶ岳紀行

津 田 実

7月27日午前5:15新穂駐車場を出発、蒲田川左俣谷沿いに北上する。何年かまえ西穂に登ったときに泊った旅館の前を通過、あのときは夜来の豪雨に肝を冷したことを思い出し乍ら進むと林道のゲートがあり車は通れない。然し我々徒歩組はさっさと通過、道は右へ急角度に折れて登り出し直ぐに左に曲って緩やかな傾斜で続く。左岸から右岸に移り少し行くと右側に発電所があり、それから5分位で左側に立派な標識があった。笠ヶ岳の取付点である。此処で朝食をとり出発する。少し行くと地図にない沢が2ヶ所もあり清冽な流であった。水を補給しようと思ったが、もっと上にも水場があると思って断念した。それが死の行軍につながると夢にも知らずに。なにものも忘れ、只、ひたすらに登るにつれて高度が上り何時の間にか先程の林道も、西穂高へのロープウエーの赤い屋根も遙か下に見える頃、やっと杓子平に出た。そこに待っていたのは笠ヶ岳に連なる稜線と首も焦がす炎熱だった。

昨年雲ノ平へ行ったときは途中で食事を作って休んだから、今年もその心算で材料を沢山仕入れて来たのだが、肝心の水が無ければ食事が作れない。原田さんには朝ごはんを貰ったからもう無理は云えない。仕方なく遠くに見える雪渓迄歩くことになる。地図を見ると1時間足らずの歩行で水場だ。三橋さん達は抜戸岳目指して先行して行った。

疲労と空腹とたたかい乍ら炎暑の中を歩くのは辛いものだ。荷物は大概雅弘さんに大半持って戴いたので空に均しいのだが、後輩の原田さんに励まされる羽目と成る。登山路左側に小さな雪渓があったので水を求めて行ったが汚くて流れている水は駄目だった。大概貞さんが上の雪渓の水を持って来てくださったから岩のかけでその水を戴いたが、そのうまかったこと、地獄で仏に逢うとはこのことだろう。そのうち先行の2人も心配して見に来てくださった。まったくだらしのないことだ同行者に対し面目ない。

食事が出来たから皆さんに先行して戴き、大分遅れてやっと稜線に這い上る。矢張り苦労して登って来た甲斐があった。左俣谷の橋から約1,400m登ったことになる。前面に穂高連峰から焼岳乗鞍と遠く八ヶ岳らしいものも見えた。西面は残念乍らガスで視界は望めなかったが、そのうち抜戸岳へ行った大概雅弘さんと三橋さんが帰って来られた。抜戸岳からは、立山、薬師も見えたとのことだった。

前夜テント組と小屋組に別れて泊ったが、朝6時に小屋前に合流して山頂へ向う。山頂では播隆上人ゆかりの跡はないかと探したが何も見付けられない。昨日は笠新道を登ったが、今日はクリヤ谷へ下るコースを取る。下り6時間30分とあったが。

山頂から雷鳥岩へ直接下るコースもあるが、昨日上った人の話によると余り好いコースではない

とのことだったので山頂を捲くコースを取る。先行に7・8名のパーティが歩いているのが見える。尾根コースは景色が好いし、早朝のせいか涼しい。十分に充電したので皆さん元気が好い。天気も好いの三拍子がそろって足どりも軽い。あっと云う間に雷鳥岩迄来て仕舞った。前方に錫杖岳の特異な山容が見える。大槻雅弘さんの話によると岩の練習場だとのこと。クリヤノ頭で一本立て尾根から沢へと下りだす。涼しいうちに稜線を過ぎて早く樹林帯に入って仕舞わないと、昨日の愚を繰り返すことに成る。急げ、急げ。

クリヤ谷の径は昨日遅く小屋に着いた人からおおよそのことは聞いていたが、余り人が歩かないと見え、非常に荒れていて歩きにくい。此の頃から又、胃が痛み出した。然し頑張るって歩く。どんどん下って行くと急に賑やかな人声が左下手に聞こえ、水音もする。地図上の第一水場らしい。行って見ると先程見えたパーティが食事を終えてやすんでいられたので、我々もその付近で食事にする。昨日は水が切れて死ぬ思いをしたが、今日は沢沿いの径だからその心配はない。だが、今日中に京都迄帰らなければならぬ。だから余りゆっくり食事を楽しんでもいられない。尻に帆を掛けて空身でどんどん下る。荷物は同行の皆さんのお世話になって!! 第二の水場で余り胃が痛いので休み。歩くと胃が動いて痛みがひどくなるようだ。歩行速度が極端に落ちて来る。だが、これ以上皆さんに心配を掛ける訳にはいかん、頑張るって歩く。苦しい闘いだ。大槻雅弘さんが後にピッタリと付いていて戴けるので、肉体は痛んでも心理的には楽だ。

右手にクリヤ岩小屋が見えテントがあった。山カンで槍見温泉迄あと2Kmと読む。錫杖岳の岩場に挑む若者が、それから少し下りると右手からクリヤ谷に入る谷筋にもテントがあった。穴滝上部でクリヤ谷を渡る。昨日笠新道の入口にクリヤ谷釣橋は崩落している。水量の多いときは渡れませんがと書いてあったので、皆が寝られてから小屋の人に聞いたところ、大丈夫と聞いていたが!! 水量が少なく、なんとなく渡れた。崩落した橋というのも注意すれば渡れたかも知れない。ただし、水量に吞まれ恐怖心が高まればどうか。又、降雨ときは駄目だろう。ただし、崩落した橋に乗ってたしかめた訳ではないので、木の腐蝕度が問題だ。

槍見温泉手前で遂にダウン。大槻雅弘さんの介抱を受ける。三橋さんが新穂の駐車場へ車を取りに行って下さった。そのとき三橋さんの声が出た。「槍見温泉迄、あと10分」とその声に励まされ、ふらつく体に気合を入れて歩くと、突然公衆電話のボックスが現われ少し広い所へ出た。其処が槍見温泉の駐車場だった。やっと人里に出られた。もう少しで、公衆電話ボックスの窓に行方不明の登山者を探す家族の方のお願いが貼ってあったが、小生もこの人の二の舞と成るところだった。同行の皆さん、本当に御迷惑をお掛けしました。申し訳ありません。

(反省点)

- (1) 前夜突1泊と云う計画に無理があった。
- (2) それ起因し、睡眠不足となり、必然的に疲労の蓄積、食欲不振、炎熱、体力低下、年齢によるバイタリティー不足、食料・装備の勉強不足、なかでも水を切らしたのが致命傷となった。山でバテル要因を総てそろえたような山行であった。それは、小生のみであって、他の同行者にはあてはまらないが!! 何故か、小生以外は誰も故障を訴えな

かったから。

(結論) 山の基本を逸脱している。原点にもどるべきだった。

立山から剣岳～唐松岳～

爺ヶ岳・乗鞍岳

坂井久光

8/15 金沢の墓参へ旅立ち、以後立山・剣から後立山連峰縦走し帰路乗鞍岳を登って帰京。金沢で福久に久しぶりで会い語り合って富山に行き、橋本広氏に会って夕食を御馳走になり駅前ホテルで一泊。

翌16日 バスは予約がなくて電車で立山駅へ、ケーブルで美女平に上るも約2時間バス待ちの大群集で構内一杯の人出だった。久しぶりの立山もガスで展望はよくなかったが、ガイドの説明で昔来た頃が思い出されて懐しい。道も良くなり室堂迄行けた。立山の湧水を試飲して出発。そろそろ歩きの人波をかき分けて立山へ。下山者も多く100人以上も抜いて山頂三角点へ。次いで雄山神社でお祓いを受け神酒を戴き剣へ向う。途中大汝峰へ登るが大汝とは大なむち(大地持)の意で大国主命に因んだ名前で白山から飯豊山迄勢力圏が拡がり、命の信仰が残っている。途中クラノ助荘へ立寄り一休みして剣御前荘で一泊。

8/17 早朝新築の山荘を出発。眼下の剣沢に花の如くマナスル型テントが設営され、山荘が見下ろされた。御来光を撮りにカメラが沢山道筋に陣取っていた。夜明けの曙光が鹿島槍の方向から射して来て山容が浮出した。何度見ても大自然の荘厳な一瞬である。前剣岳の三等三角点を通りコルへ下りいよいよ剣の峻険に取付いた。子連れのパーティーに追付き一服剣で追越し、その後も何人も遅い人を越して岩をひたすら登り、蟹の横這いも鎖があり難なく通過。次いで鎖場の登りも一気に登って流石少ししんどかったが剣山頂の社へ着いた。十人余りの先着者が休んでおり、こゝで朝食をして一服した。天気は良く今日は仙人山荘へ行き一泊の計画で、バトロール隊員に道の状況を聞いて長次郎雪渓を下ることにした。

急坂急崖を鎖を頼りに急下降してコルからガレ場を下ったが崩れそうで落石を注意して下山。途中右手口から自然落石があり音をたてて雪渓へ飛んで落下して行った。雪渓の下流に登山者が見え大声で「落石」とどなったが、途中で止つたらしい。全く物騒な雪渓で飯豊山の石転び沢・皮梅花(カイラギ)雪渓を思出す。

左岸寄りの道跡を用心して下り雪渓に取付き、途中棒の杖を拾って杖として急斜を要心して滑って下り暫くグルセードを楽しんだ。途中八日市の山岳会がテントを張って岩登りに来ていて、知人を尋ねたら知っていると言へ京都から来たと言いと、一人で元気だと驚いていた。剣沢の出会いで昼食をとり、一服して真砂沢小屋に行き缶コーヒー(¥350.)を飲み一服して二股の近藤岩へ。釣橋を渡って仙人山へ登った。途中川西市の娘さんが一人休んでいて一緒に登ったが疲れていて足

が遅く、夕立が来る頃やと稜線近くの分岐（池の平）に出て仙人山荘へ逃げ込んだ。この山小屋は親切で夕食も冷奴が出され一同を吃驚させたが、小屋の母親の手製であった。東京や川西の人と翌日同行することになった。

8/18 早朝仙人池へ行き池面に写る八峰の景を賞で皆が写真にとった。朝日に輝く光景は真に絵画的で今迄写真で何度か見た光景が現実となった好運を祖先の霊に感謝した。仙人の場を右手の谷向うに険しい仙人谷をひたすら下り、仙人の窟があり昔行者が修荷して住んだ跡で光ゴケがあると告げてあった。

雪溪を二・三渡って鎖場の急崖を下りやと阿曾原へ。露天風呂や小屋があるが、缶コーヒーを飲んで一服。こゝから長い関電歩道の歩行が始る。始め約200m程登って後は大体平担だが、上り下りはあり黒部川の左岸沿いに山腹を巻く巾50~100cmの歩道で、要所は針金やガードがしてある。途中水場で一服し、滝のある谷で昼食して長い水の流れるトンネルを潜って対岸へ抜け樺平が眺められる地点へ来たが、その後も登り下りがあり、最後はジグザクの急坂を一気に下り樺平へ。人が多く電車は満員の盛況であった。一行と別れ、一人祖母谷温泉へ行った。川沿いに上り長いトンネルを潜って出ると橋の向うに祖母谷温泉が見えた。

8/19 祖母谷温泉を早朝出発。昨夜はよく眠れなかった。橋を渡って祖母谷林道を少し入ると唐松岳登山口の標柱があり急坂を登って南越谷沿いに登って奥の二股の中尾根をジグザクを混えて登ると、ブナ・ミズナラ・クルミの樹林帯に入る。奥鑛山からの稜線に出てほっと一休み。祖母谷2H・唐松岳6Hの標柱あり。尾根筋の登りを迎り△1669の直下を巻いて朝露にズボンがずぶ濡れになる。此の辺りからサワラ・ツガ等が尾根の先端に数本づつ聳えている所があり、高山の様相を示す。

溝状の谷筋の道を迎り小さな湿原を通りピークを下り餓餓谷の山腹を延々とトラバースする道が続く。少し登って又下り又登ると云う風で大して高度が稼げず道も悪く急崖にはザイルがはってあるが弛んでいて余り役に立たず要心して渡った。又猿が時々鳴いていた。途中富山の青年が1人と大阪の親子連れとが大黒鉾山の1時間前と大黒鉾山跡で出会った。

険しい道も鉾山跡迄で此所はキャンプサイトになる程の平坦地の別天地だが水場がなく赤黒い小池があり、鉾山の小山がある丈だった。此所迄来てほっとして一休みして唐松岳へ良い道を登った。樹影で風があり白樺が多く爽やかな道で唐松小屋が見える分岐の手前で昼食して一休後、尾根筋の急坂を登った。

這松の出る頃四葉塩ガマや白山フウロ等の高山植物が咲き、当薬リンドウ・深山秋のキリン草が見られた。山頂直下のガレ場には駒草の群落があり可愛い姿で咲いていた。山頂は二等三角点があり2・3人の人が登っていた。振向けば剣や立山が雲煙の彼方に姿を見せ、北に白馬岳・鑛ヶ岳の連峰がガスに包まれていた。唐松小屋に下って早いが疲れたので一泊。朝5時出発で登って来たと云うと小屋の人は早いと云って吃驚していたが、別に急いだのこともなく8時間の行程が10時間程かゝったので遅いと思った。美しい喫茶店へ行きコーヒーを飲みゴージャスな気分になる。

翌8/20 朝食后出発、今日も快晴。五竜小屋で一服して峻峰を登り五竜岳の三等三角点へ。

道から少しはづれた所にあり訪れる人は無かった。少時展望を楽しみ下山。急な下りを鎖やジグザグを交えて下り、途中ピークを越して下るとキレット小屋で一服。又も鎖や橋や梯子の峻険な大キレットを要心して通り急坂を岩や鎖を頼りに登って鹿島櫓の北峰の分岐へ。北峰へビストンしたがケルンがあるのみ。南峰へ登り二等三角点 2890m である。二年前に小熊山から見た双児峰、又剣から御来光の時見たその秀麗な山頂に立った喜びを深く噛しめて一休みしたが、展望はガスが多くて駄目。遠くで雷が鳴っていたので夕立の心配もあり、布引岳を越え冷池小屋へ急いだ。ぐんぐん下ってテント場を過ぎると冷池小屋であった。

一泊して翌 8/21 爺々岳を越え種池小屋で一服して肩沢へ下り、バスで大町へ。爺々岳頂で新人ハイカー一行と会った。大町から汽車で松本へ行き電車で新島々へ。バスで白骨温泉へ行ったが満員で上高地坂巻温泉へ車で行き一泊。

翌 22 日、バスで奈川渡乗換え乗鞍岳行バスに乗り山上駅へ。途中柳蘭や兎菊が咲き、昔恩師森本次男先生の兄猪谷六合雄が、その息子千春をスキー選手に鍛える為に住込んだ番所ヶ原を過ぎ、鈴蘭台を通った。山頂駅は人で溢れ、観光地となり果て登山の気分はなく散歩かピクニックの感であった。山頂一等三角点へ登り展望を楽しんで下山。バスで高山へ出て汽車で岐阜經由帰京した。

〔コースタイム〕

- 8/16 7:27 富山—8:32 ~ 10:31 立山… 10:38 ~ 10:46 美女平… 11:30 室堂… 12:16 ~ 12:30 一の越… 12:56 ~ 13:45 雄山△… 14:00 ~ 14:13 大汝峰… 15:00 ~ 15:10 内之助平… 15:55 剣御前荘(泊)
- 8/17 4:30 出発… 5:03 ~ 5:12 剣御前峰△… 5:57 ~ 6:31 コル… 6:22 ~ 6:28 一服剣… 6:54 ~ 7:00 休… 8:23 ~ 9:13 剣岳… 10:28 ~ 10:47 休… 11:30 ~ 11:35 休… 12:21 ~ 12:43 昼食(長次郎出合)… 13:25 ~ 13:30 真砂沢小屋… 14:36 ~ 14:42 二股… 17:10 仙人山荘(泊)
- 8/18 6:00 出発… 10:00 ~ 10:25 阿曾原温泉… 12:10 ~ 12:50 滝の谷… 16:08 ~ 16:23 湍平… 17:10 祖母谷温泉
- 8/19 5:06 出発… 5:12 登山口… 5:42 ~ 6:07 水場… 6:25 祖母谷 50 分標… 7:00 ~ 7:10 クルミ大木… 7:50 奥鐘山稜線 祖母谷 2 H、唐松岳 6 H… 8:41 ~ 8:44 水場… 8:51 谷川… 10:00 ~ 10:10 休… 11:00 ~ 11:10 大黒鉾山跡… 11:52 小屋分岐… 12:00 ~ 12:35 休… 13:05 ~ 13:14 休… 13:50 ~ 13:55 休… 14:30 ~ 14:40 唐松岳 2696m… 14:56 唐松山荘(泊)
- 8/20 6:25 出発… 7:14 ~ 7:20 コル… 8:03 ~ 8:20 五竜小屋… 9:08 ~ 9:15 五竜岳△ 2814m… 10:03 ~ 10:12 休… 10:30 ~ 10:40 休… 10:57 ~ 11:00 コル… 11:45 ~ 12:15 キレット小屋… 12:54 ~ 13:06 休… 13:23 ~ 13:24 分岐… 13:30 ~ 13:38 鹿島櫓北峰… 13:44 分岐… 14:05 ~ 14:15 鹿島櫓南峰 2890m… 14:45 ~ 14:52 布引岳… 15:30 冷池小屋
- 8/21 6:00 出発… 7:15 ~ 7:30 爺々岳… 7:55 ~ 8:05 種池小屋… 9:00 ~ 9:05 休… 9:11

1. 7km 40分…10:05～10:25 肩沢…10:55～11:37 大町…12:37～13:25 松本
13:55～16:15 新島々～17:15～17:45 白骨温泉～18:30 坂巻温泉(泊)
8/22 7:42 出発～8:01～8:28 奈川渡～9:50～9:57 乗鞍山上駅～10:56～11:10 乗鞍岳
1等△3026m～12:00～12:45 乗鞍山上駅～14:15～14:32 高山～17:06 岐阜

山 癖 雑 記 二 十 七

伊 藤 潤 治

仏ノ尾と

この日は、佐久間図の計画がお預けを喰ったので、その代りに若椋図の山に登ることにしたのだがこれでは厄をすっきり払えなかったのか、(佐久間の山は明年五月に必登したい) 前日より大雨警報が発令され、山のぼりは相当な覚悟が必要であった。

雨を降らすのは勝手だが、私には災難である。登山に悪天ほど不快で、地獄的なものはない。あらゆる幸福を司るために祀られている神々にして、こんな時大雨をもたらすとは罪悪であり、あやまちでなくて何であろう。私は神々に向って、今明日、私の登山を不能におとし入れ悔まれることのないよう、心なされるよう忠告、いや、うそぶいて家を出た。むなしいようだが、こんなはづみのついた若椋図であった。

園部、福知山は、まあまあ。但馬にかかってやはり曇り出し、美方町では霧雨になった。佐坊の傾斜路を上っていくと、庭仕事の老人がいた。白いカッターに古背広の黒チョッキ着用で、一見今はなき西岡老に似ている。

その人に仏ノ尾と青ヶ丸をたづねると、絶対のぼれないと片付けられてしまった。けれど続けて以下の如き仏ノ尾由来をきくことができた。「昔、山頂に石仏が祀ってあった。ある時、因幡と但馬でこの石仏は、何れの所有仏かで論争が起り、もめぬいた擧句決着は馳けくらべて話がまとまり双方から選抜の走者を出したが、何とそれが同着であったとか。それではと石仏を見ると、いつの間にか首と胴とに割れて、首は因幡に落ち胴は但馬に伏してあったという。

一つしかないものを醜くく取合ってはいけない、という仏の戒めであると後悔し、因幡は首を祀り但馬は胴を近くに祀ってある」そうだ。

ところが異なる仏ノ尾由来が、もう一説あって、それは「昔、この地に来る日も来る日も大雨が降りつづき、やがてこの辺り一帯が泥海のようになり、家々に水没・流失の危難が迫った時、村人たちは藁をもつかむ思いで、御仏のお力にすがろうと御仏を山頂に担ぎ上げて晴天を祈願した。これ以来あの山は仏ノ尾と呼び慣らされていて、仏頂山の別称もある」とは、青野の井上正左衛門氏による。

ちなみに仏頂山は、日本山嶽志が「仏頂山、但馬国美方郡ノ西方ニアリ、小代村ヨリ二里二十町

ニシテ其山頂ニ達ス、全山輝石安山岩ヨリ成ル、標高凡三千六〇〇尺」と載せている。

庭仕事の人には登れないと教えても、驚かずに礼をのべて山に向って行く私を見て、どう思ったことだろう。その直後、佐坊の端で登山にご理解深い中村総一郎氏から、随分茂っていて大変だと思いますが、ひとつ頑張ってみて下さい。との激励と一応のコース説明に概念図まで付けていただいた。当初は山中一泊で、仏ノ尾・青ケ丸を巡るつもりであったが、いくら明日は晴れる予報であっても、既に雨を被っている山には天幕を担ぎこむ勇氣はなくなって、その日は仏ノ尾のピストンを考えた。

中村氏の図示に従って大根畑につき、心急いだが、ホトトギス・カッコー・ウグイスを聴きながら昼食をとり、軽装の雨装束で下生えのまばらな自然林に入る。快適だとたのしく思ったのは、ほんの僅かで、昭和40年から50年にかけて植林作業を行った。とある公団造林地にかかると、びっしり生え込みこれでも通れるかと、いわぬばかりに茂っていた。

降雨のなかその草木群に身を投じ、枝葉をかき分けていく。当然ながらまたたく間に雨装束も効なく、肌着に雨が染み通ってきた。これは覚悟の上のことだから、何の、何のとひるまず進む。しかし、いかにあがきまい進しても、衣服がびしょぬれでは体温を奪われ手足はしびれて痛く、体は参りそうに寒かった。

時折りのぞく展望や可憐な花に出会っても、足を休ませずにひたすらに登って右から尾根が上り木立に囲まれ笹の群がる平地につく。あなうれし、これが仏ノ尾の頂上、仏頂山であった。武者ぶるいしつづき急ぎ登頂の万歳、日本酒の乾盃を捧げた。そばに立つブナの幹に山岳会の文字が影っており、その折の私にはこんな芸当の余裕が、うらやましく目にしみた。

登頂を果たし気がゆるんだか、あせりがあったのか、下山のために枝折りはこまめにやって上った筈だが、下りかけてすぐ、リングワンデルングで山頂に舞いもどり、ぎょっとした。

木立とガスにさえぎられて頼りは、地形図と磁石だった。無事車にもどり着がえをすますと、歓びがどっとこみ上げてきた。だが、仏ノ尾の登頂よりも下山に成功できた歓びの方が大きかった。その夜は大根畑入口の納屋を拝借して、幕営。ぬれものがひろげられ、日没とともに蛙のにぎやかなコーラスがはじまるなか快眠をむさぼれたのは極楽であった。

6月8日 京都7:15 …大根畑 12:13 ~ 12:40 …造林地 13:20 …仏ノ尾 15:00 ~ 15:15 …大根畑 17:30

青ケ丸と

加藤文太郎氏(1936年没)は、兵庫県と鳥取及び岡山県界の山脈に兵庫アルプスの名をおくり「海拔1510.1mの氷ノ山は兵庫檜。三室山には兵庫乗鞍。1344.6mは兵庫御嶽(後山)。扇ノ山北峰(1280m位)に兵庫立山。海拔1216.4m俚称赤谷の絶頂に兵庫焼。海拔4030尺鉢伏山に兵庫大天井。兵庫白馬に仏ノ尾。海拔4090尺俚称ツツケ谷に兵庫鷲羽。(単独行より)」というふうに郷土の山やまに、北アルプスの名峰をなぞった郷土愛あふれる、実にほほえましい命名をしている。この付加名称は、いづれも先人の捧げられた違大な情熱の光景が見えるようで

すばらしい。本行はこの内、兵庫白馬と兵庫鷲羽をめざしてきた。昨日兵庫白馬の仏ノ尾に登れたので、今日は兵庫鷲羽の青ケ丸のいただきに立ち、めでたく満願を達成して、がいせんするつもりである。

この朝、静まりかえった五時前起き、ぬれ物をあぶる焚火をつくり朝食をとる。なま乾きの衣服に着がえ火の始末をして、イズ（水路）ぞいに出た。

ルートは谷からが適当に見えたので、林道を下ると、土蔵付で立派な構えの思いがけない大きい家があった。ここが青野で以前は四軒が住んでいたが、現在は井上正左衛門家一軒だけ残留し、一町歩余の田、畑耕作のために牛を飼い、諸農器具も揃えておいて、日々佐坊から奥さんと耕運機合乗り通勤でご精励という。

晴れた日には、仏ノ尾と青ケ丸を見て暮せるこの別天地青野の主は、80才だといっていたが、ここでは身体に年令をとらないのだろうか、若くたくましく男前さんであった。その青野の主より兵庫鷲羽と青ケ丸の登山道は、イズ（水路）の林道終点から入るよう助言をもらって、青野を辞去し教わった地点につき駐車。出発しようとドアをロックした。ところがキーを付けたまま、更にスパーキーも車内、さあ大変。自業自得とはいえこれで兵庫鷲羽も青ケ丸も登れないかも知れない。そんな悲しい目にあいたくないので、何とか早くうまく開けたい。ドアにすがって何かよい方法はないか、祈った。

正直いうてこれはごりやくさんのお助けに違いない。窓が僅かにあいていて、細工をしたい針金も探すとあった。そしてロックはすぐ解けた。あるいは私の守護神の働きであったのかも。だから緊迫は数分でもよこびに打って変わった。とんだへまでも万歳にありつき、兵庫鷲羽の青ケ丸の出発は、喜びと自信を深めた第一歩ではじまった。

林道を区切っている谷は、取水によって流れが停まっていると思ったが、水路は山ヒダを左へぬって延び、一ヶ所ある壁の部分には鉄製の樋で流してあったり、しぼきをあげて斜瀑のように落ちる辺りは、樹木の姿がすっきりしている絶景だった。

尾根を右へまくと、兵庫鷲羽の青ケ丸を水上の谷ぞいになって、水路はこのままどこまで上ってくれるのかたのしみだった。やがて谷底が盛り上ってきて、右から清流を運ぶ谷が出合いと水路の畦道は終わった。ここで道は途切れルートは自分で選ぶことになる。右岸ですぐの小谷に入って斜面にとりつく。ゆるやかに起伏する尾根にかかる、純林と贅えてはばかりぬブナのすばらしい林立がつづいた。

快い情景の展開に満悦で登っていると、行手に、色、形さまざまの布切れを次々とぶら下げている。なんぼ安全対策でも、こう無定見では目障りでかなわない。そう快なせっかくのブナ林の美観をかく乱さすこの心なさは、誰一人として許さない、と思う。

何とも野暮で不快な布切れである。でも、やがては自然が処理してくれることだろう。それにしても、こんな手法が必要であったのは、どんな人であったのか。またこうまで念を入れなければ納得できなかったその人の情熱を考えると、登山者として私は、これを悪く思ってはなるまい。この苦勞を評価してあげるべきだ、と気がついた。

台地状から一気に急峻になるが、これを登るとその先に古い架線跡を見て西に向へば、県界稜に至る主尾根。これで思い通りの本軌道。あと兵庫鷲羽の青ケ丸の△まで、距離約二軒。標高差約三〇〇mだから、ざっと二時間行程というのが私の計算であった。

その主尾根では、思わず「すばらしい」を叫び見ほれた風光。頑強に結ばれた通せん棒を突破。うっそうと聳え立ち神霊を感じさせる天然杉などを経て、ちょっと藪らしい茂みを登り、木立を失ない、じゅうたんを敷いたような笹の稜線におどり出た。これが県界稜である。

ここからは強靱な竹に体当りで進む。左斜面の彼方に地形図の家屋は見えたと、扇ノ山とか兵庫白馬の仏ノ尾、その他見たいと思う山はガスの中。それでいて県界稜には太陽が照り、木影も風もない皮肉な天気であった。

兵庫鷲羽の青ケ丸は姿を現わしてからでも遠かった。既に予定時間経過で、更にこの四〇〇mにてこずっている。やはり兵庫鷲羽といわれただけあって、たしかにごっつい、流石に青ケ丸であると、改めて並の山でなかった事をよるこんたものである。

△にはすんなり気持よく到着。早速、標石をなでなで登頂を祝って万歳と乾盃を捧げた。雄大な展望も咲き競う花もなく3mの笹竹の密生に囲まれた清らかな標石がただ一個あるのみの兵庫鷲羽の青ケ丸であったが、これが浄土の境地というのであろうか、私は快い充実感に包まれ申し分のない結構な気分であった。

至福の時間経過は速い、我にかえって荷をまとめ兵庫鷲羽の青ケ丸にさようならを告げ、往路を下ったが、かの布切れは天然杉の辺りで終っていて、これの主に登頂の喜びが、あったかどうか、人ごとながら妙に心に残っている。それと帰路に見るブナの純林は、惜別の情が湧き出でて、更なるわしく鮮やかであった。

6月9日 駐車点 8:40…畦道終点 9:05…架線跡 10:00…天然杉 10:50…県界稜 11:50…兵庫鷲羽の青ケ丸 13:13～14:00…天然杉 15:45…駐車点 17:20

1985.9.6

インドア講習

オリエンテーリングについて

近藤 薫

1. オリエンテーリングとは、ドイツ語で「方向を定めて」(Orientieren)「走ること」(laufen)という意味であり(略してOLという)、地図上に示されたいくつかの地点(ポイント及びゴール)をできるだけ短い時間に探しあてる競技であって、北欧では1850年頃から軍事教練として発展し、わが国では、昭和39年閣議決定により国民の体力づくりのために徒走OLが導入された。

2. OLの特徴

1. 頭のスポーツ。
2. 自然の中にコースを設ける。
3. 自主的解決の場。
4. 機械器具等を用いてもできる。
5. 同一の条件のもとで競技できる。

3. OLの形式

1. ポイントOL (地図上に示したポストを順番に探し当て早くゴールする)
2. ラインOL (指定した地図上のコースをたどり、コース上に設けたポストを探しあてできるだけ早くゴールする)
3. スコアOL (地図上のポストを制限時間内にできるだけ多く廻り、ポストの点数を集める)
4. バーンOL (ラインOLの変形で小旗や樹木につけた色とりどりの布切れ、紙片、チャークなどの目じるしをたどって行き、そのコース上にあるポスト位置を探して自分の地図上にポスト位置を記入)
5. その他 リレーOL、クロスOL、コンパスOL、ネットOL、スキーOL、自転車OL、ボートOL、ナイトOL等の変形なものがある。

4. 徒歩OL

1. 走ることは禁じられる。
2. 個人単位でなく、3人～5人のパーティーで単位とすることが多い。
(* 体力づくりの徒歩OLから、国際式の走るOLに進んで来た)

5. OLの順位決定

規定時間…… 上位3名の平均所要時間を2倍したもの。

入賞時間…… 上位3名(パーティー)の平均所要時間に25%を加算した時間。

注1. ペナルティーのある者は正当最終走者の後に順位づける。

注2. ペナルティーとはポストを抜かしたもの、ポストが前後したものの。

注3. ペナルティーは規定時間を全ポスト数で割った時間である。

注4. スコアOLでは超過時間が減点の対象となる。

6. 地図の読み方

1. 縮尺と距離の測定
2. 記号
3. 等高線
4. 地図の正置
5. 現在位置の確認

7. 磁石の使い方

1. シルバー コンパス
2. 磁北線(偏差、磁気の荒レ、帯磁物)

例 会 報 告

例会No	目的地	月 日	天候	担当者	参加者	記 事
1549	鎌倉谷	8月17日	晴	大倉寛治郎	武田喜久郎 大槻 雅弘 吉田 武 山口 雅直	谷と平行して登山道がついているが、途中より登山道と別かれて核心部を登る。最後の7mの滝を登りブッシュをこくと稜線に出る。5分で三角点へ…
1550	上多古本谷	8月24日 ～25日	晴	鷲見 敏一		市長選挙の投票日なので中止する
1551	金毘羅R.C	9月 8日	晴	吉田 武	岡田 茂久 大槻 雅弘 台川 敦美 大倉寛治郎	北尾根を登り途中よりM.Kフェイス 中央ノーマルルート及び、左岩峰を登りホワイトチムニーをトップロープで練習する。午後より台川、大倉、他参加

雑 報

▲ 9月集会報告

10日 下鴨寮

出席者 OB 近藤、津田、坂井

本局 和田、鷲見、大木、三橋、井戸、原田、楠

高速 岡田 梅津 吉田、広瀬

九条 古市 烏丸 大倉、台川 以上 16名

インドア講習として近藤親分から、オリエンテーリングについて詳細なる説明を聞き、10月20日に今度はアウトドアとして実際にやって見ようという計画ですので、初めての方も、ぜひ参加してください。

〔入 部〕 洛西 竹井 章 S 11.12.5生 (A型)

西、大枝西新林町1丁目4-8 TEL 331-7660

▲ 部費受領

〔高速〕 岡田茂久、出海洋三、石田幸次、河合秀晃

〔市役所〕 荒田又之助 木原 滋 (醍醐) 北川 晃、岡本 勇

帆 布・漣 布
テント・シート
雨 合 羽
木村工業株式会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 801-5331(代)
西大路営業所
下京区西大路七条下ル
TEL 321-0251

愛されるスポーツ店

京菱運動具店

本店 下京区大宮通松原上ル
TEL (801) 1331
十条店 南区竹田街道十条上ル東側
TEL (691) 8041
伏見店 伏見区伯耆町西友ストア-4F
TEL (623) 0824
山科店 山科区音羽野田町1番
西友ストア-山科店
TEL (592) 9770 内線 228

一年中、山用品だけの

営業時間 **プロショップ**

午前10～午後1時と午後3時～午後8時
(午後1時～3時は閉店させていただきます)

<定休日> 火・水曜日

山・アウトドア プロショップ
ロケケビン



京都市中京区御幸町通
蛸薬師南入
(四条河原町・阪急河
原町より徒歩約4分)
TEL 221-7569

建設省国土地理院発行地図販売特約代理店

あらゆる地図のご用命は

株式会社
小林地図専門店

600 京都市下京区烏丸通六条下ル

TEL 075(351)6598(代)

地下鉄：烏丸五条 6番出口南50m

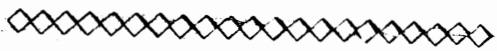
市バス：烏丸六条下車

昭和60年10月1日

京都市中京区壬生坊城町48

京都市交通局内

京交山岳部



お知らせ

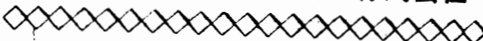
今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。改築期間中(約1年間)は、本店2階にチロルコーナーとして継続営業いたします。



移転先 本店2階

京都市中京区西ノ京門町24

ダイヤ運動用品株式会社



まかせて下さい...ネ



のことなら...

☆在庫豊富にとり揃えています

☆山の道具は セヒ 御相談下さい

山とスキー専門店

ビッグホリキ

河原町店 上・河原町通丸太町東入

TEL 222-0363

御婚礼
御引越



ぎおん菊水運送株式会社

山科配車センター

京都市山科区西野山階町12-12

TEL (075)581-3101

本社

東山区大和大路通四条下ル 541-2345

夷川営業所

中京区室町二条上ル 256-3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品

贈答品総合センター

厚生会指定

サンコークラフト

西島輝雄

左・川端通丸太町下る下堤町88

TEL (075)771-3442



山とスキーの店
京都 **あるむ**

京都市中京区新町三条上ル

075-255-0288

HIKE & CAMP

この用具の事なら「ニシ」が一番です!

御来店ありがとうございます

山とスキー レジャー スポーツ ショップ

そして

海の



中・二条通河原町西 TEL 251-1202